別記様式第４号

平成 30 年度 地域貢献研究助成費 実績報告書

平成 31 年 3 月 27 日

報　告　者	学科名	保健福祉学科	職 名	講師	氏 名	樟本千里
研 究 課 題	保育者の協働性と意図的保育から保育者の資質向上を考える―園内省察会を通して―					

研 究 組 織		氏　　名	所 属 ・ 職	専 門 分 野	役　割　分　担
	代表	樟本千里	保健福祉学部・講師	教育心理学	研究計画、実施
	分担者	伊藤智里	川崎医療福祉学・講師	幼児教育学	実施

研究実績の概要	
	【目的】保育の質の向上と保育者専門性の向上がますます求められており、「教育力の向上」は保育の現場において必須課題となっている。そのための方法の一つとして、研修の強化が進められており、リーダーとなる保育者の育成や、実践者が研究者と共同で行う研究などが勧められてきている。このような社会背景の中で、代表者は、県内の保育所との共同研究を行い、園での研修や、保育実践者研究の援助を大学が行い、保育所の研修力・研究力向上の一助となることを示そうと試みてきた。2015年の取組では、教育目標（活動のねらい）を意識しないままに活動を行っていること、2016年の取組からは、子どもの変化（成長）をとらえることはできるが、保育者自身の教育方法（援助）と結びつけて考えることができていないこと、2017年の取組からは、子どもの主体的な学び（活動）を保証するためには、①異年齢学年の担任保育者間の情報共有、②日々の教育内容（活動）との連続性、③教育目標に即した意図的な保育者のかかわりの３つが重要であることが示された。これらは、すべて保育者の指導法における課題である。教育活動を通して、子どもを理解することも重要ではあるが、より良い教育活動の推進には、保育者の対象とした研究及び保育者の保育態度の変化が重要であることが示唆された。 　将来的には、園内研修のモデルを提言することを目指し、2018年度は保育者の省察会をとりあげ、①異年齢学年の担任保育者間の情報共有、②日々の教育内容（活動）との連続性、③教育目標に即した意図的な保育者のかかわりが、保育者の振り返りの中で語られてくるかについて検討した。 【方法】調査対象：0歳児、1歳児、2歳児、3歳児、4・5歳児の担当保育者および主任保育者。調査方法：調査対象としたのは、0歳児、1歳児、2歳児、3歳児クラスに4歳児・5歳児が参加する活動である。2018年度の5回（6月、8月、10月、12月、2月）の省察会に参加し省察会を記録した。分析対象：①活動のふりかえりとして提出された活動評価記録。②次の活動の指導計画案。

※ 次ページに続く

研究実績 の概要	【結果】これまでに乳児クラス（0 歳児、1 歳児、2 歳児）の分析は終えている。今後幼児クラス（3 歳児、4 歳児・5 歳児）の分析を行う予定である。ここでは、乳児の結果のみを報告する。 「保育者の協調性」については記録にはほとんど表れてこない。「意図的なかかわり」については、何らかの“学び”を想定しているクラスと“共にあること”を想定しているクラスがあった。学びを想定：例）0 歳児の興味のある遊びを 4,5 歳児に知らせ気づくようにするという保育者のねらいがあった。0 歳児と関わる遊びをした後に、0 歳児が興味をもつ玩具を保育者の中から見つけてくるという遊びをすることで、年長幼児の理解を促した。活動の終わりには、5 歳児が次回は自分たちが 0 歳児の楽しめるおもちゃを作成してくると提案してきた。興味がものに向いているので、年下の子どもにかかわることに興味を向けたい。記録からは、ねらい→活動→活動評価→次回のねらいとつながっていくことがうかがえた。ともにあることを想定：例）3 つの異なる年齢の幼児が一緒に遊ぶことに保育者のねらいがあった。遊びが盛り上がるように声をかけ遊びが継続した。各年齢の子どもが楽しめるように遊びの役割分担を行っていた。記録からは遊びが継続しねらいが達成されたことが分かるが次の活動のねらいは見出されていなかった。
成果資料目録	たてわり保育における保育計画と省察―0～2 歳児クラスの保育者のねらいと評価― 伊藤智里・樟本千里、日本乳幼児教育学会第 28 回大会、口頭発表